

# 「彼の朝鮮行」が語るもの

梁 智 英

## はじめに

「彼の朝鮮行」は、『改造』一九二〇年一〇月号の「秋季増大号」に掲載されたものだが、二年後の一九二二年九月著者が朝鮮に関連する文章を集めて『朝鮮とその芸術』というタイトルで単行本を出す際に同書に収録してもいる。当時『白樺』派として活動していた柳宗悦が『改造』に朝鮮に関する文章を載せたのはこれが二回目だった。最初の文章は、改造社からの要望によって一九二〇年六月号に載せた「朝鮮の友に贈る書」である。さまざまな政治的な発言の問題を抱えたその文章は、多くの部分が削除されながらも、『改造』に掲載されるが、掲載されるまでの経緯と、読者の反応については「彼の朝鮮行」のなかで説明されている。したがって二つの論文は柳の朝鮮観を表すひとまとまりの著述と認められる。

「彼の朝鮮行」に関するこれまでの先行研究では、「彼の朝鮮行」を柳宗悦夫妻が一九二〇年五月一日から二十二日の間にふたたび朝鮮を旅行した事実をもとにして書いた紀行文であるこ

とを前提に、柳と朝鮮との関わりを検証する過程のなかでの一資料として扱ってきた。それゆえに「彼の朝鮮行」は、柳の心情や当時の状況、また彼の行動に対する反響が知られ、「日本の横暴と朝鮮人の悲痛な心情を暴露した」文章が書かれている点が高く評価されてきた。<sup>1</sup>しかし、「彼の朝鮮行」は実証的な資料としての価値があるがゆえに資料の一部としか使われないか、そうでなければ、そのテキストが与える情報に対して時代との関わりのなかで概説的な説明が加えられるだけだった。

しかし、あらためてこのテキストを紀行文としてみた場合、なぜ柳宗悦はあきらかに自身と思われるテキスト中の人物を「彼」という二人称でしか呼ばないのか。また、作者（柳宗悦）と「彼」との間には距離が見えるが、その距離はなにを示唆するのか。そして、それをおして何を語ろうとしたのかなどのテキストの内部にみられる、いかにもフィクションのような叙述構造問題に関することには触れられてこなかった。おそらくこれまでの先行研究では、柳宗悦の紀行文として見なされてきたがゆえに、「彼＝柳宗悦」という図式から離れずにテキストを読んでいたからであろう。

したがって本稿では、「彼の朝鮮行」を一資料として扱ってきた従来の研究とは角度を変えて、まず、このテキストの内部構造を「彼」柳宗悦」という図式で理解することから離れて「彼」——「記者」（語り手）——「柳宗悦」（作者）というリアリズム小説の構造のもとで執筆された著作と捉え、「彼」を主人公とする「彼の朝鮮行」という物語の世界を分析していく姿勢を貫くことにする。そして、その構造をふまえて「彼の朝鮮行」が一九二〇年代の朝鮮の風景や人物・芸術を描いていく時、その意図がどこにあるのか。とりわけ「彼」のまなざしが何を、何を見ようとしなかったのかを柳の叙述に織りなされる「情」とか「愛」といった語彙とかかわらせて考察し、そこから読み取れるメッセージを明らかにする。本稿からすると、このテキストにあつては叙述の内部構造とメッセージとは密接に結びついているとみられる。その追究をとおして、これまでは紀行文という資料として読まれてきた「彼の朝鮮行」の新しい読みを試みる。

## 一 「語り手」と「彼」、 そして「手紙」という記号の機能性

「彼の朝鮮行」は、「彼」と彼を語る「語り手」という構造で成り立っている。「語り手」は、時々「記者」という存在として現れ、読者に対して「記者」としての「語り手」であることを確認させている。しかし読者は、物語の相当の部分まで読み進めないと、「語り手」が「記者」であることがわからない。

なぜなら、「記者」として作中に姿を現わすのは後半部分の三個所ではないからだ。この「記者」の登場によってはじめて読者は、この物語を語っている「語り手」が作者柳宗悦とは異なる「記者」であることに気づくようになるわけである。それなら、なぜ、柳宗悦はわざわざ「彼」という三人称の登場人物をおき、「記者」という語り手に書かせる（語らせる）といった構造で叙述をすすめるような小説仕立ての構造をとったのか、またどこにその意味があつたのかが問われねばならないだろう。この疑問を解いていくために、まずここでは、物語のなかで「彼」がどのように描かれているのかを確認してみる。

彼はいつも彼の傍から離さなかつた朝鮮の磁器に又も心を奪はれてゐた。彼はいつもそれ等のものと話す事が出来た。然し互いに通ふその心は、いつも寂しい情を誘つた。（中略）彼が愛して又親しさを感ずるその隣邦の人々が、苦しい日を送つてゐる事が、絶えず彼の耳に聞こえてゐた。彼はそれ等の人々の哀情をまともに読む想ひがした。なぜなら彼の手近くに置かれたそれ等の磁器は、その苦しさを彼に告げない時はなかつた。（二七頁）

この引用文はテキストの冒頭部分であり、読者にこれから登場する「彼」に関する情報を与えているところでもある。これを見ると、「彼」は「朝鮮の磁器」に「心を奪われてゐる」人で、そして、「朝鮮の磁器」は、「彼」に「人知れぬ情の世界を示し」「寂しい情」を誘うだけではなく、「隣邦の人々」の「苦

しき」を彼に告げてくれる。したがって、われわれはこの引用文によって「彼」が日々それらの物と共に生活していて、磁器をとおして朝鮮人を理解していることもわかる。「彼」は、朝鮮の古物に深い関心をもっていて、物と人との間の相応を認め、もしこれらの古物に高い価値があるとすれば、それをばぐくんできた民族（朝鮮の人々）もまた価値を認めるべきだと信じ、その考え方をとおして他者（朝鮮）を理解しようとする人物として描かれているのである。

このように朝鮮の芸術品に深い興味をもっている「彼」は、その一方で、「如何なる政治にも多くの信仰を持たなかつた」（二八頁）と断言し、政治に信頼をおかず、政治から離れている人であるとも語られている。本稿はここに物語の構造とメッセージの相関がどこに向かおうとしているのかの示唆を得る。だからこそ作者柳宗悦は、「彼」という三人称を設定してテキストの構造の背後に隠れた、あるいは距離をとったとみるのである。距離をとることによって既存の政治には信頼を置こうとしない「彼」は、政治に批判的な日本の若い人の味方であり、また日本の政治に対していつそう批判的で朝鮮にも朝鮮人の友がいるような幅広い交友関係をもつことが許されているのである。そのような「彼」が、妻と共に「かねがね朝鮮に対して抱いてある敬愛の念を、何事かによつて披瀝したいと考へがあつ」（三〇頁）で朝鮮への旅行を決心し、朝鮮で音楽会を開く計画を実行する。

このように、語り手によって描写されている「彼」は、さまざまな理由で苦しんでいる隣邦の人のことを哀れむほど「情」

に溢れ、また、その人達をはじめ多方面での交友関係をもっていて、人間味のある人であることが読み取れる。したがって、このような「彼」の朝鮮旅行は、政治の世界では実現不可能な「他の幸な世界」、すなわち朝鮮が幸福に暮らす世界を、朝鮮を旅行することによって「彼自らに味うと」するオプティミスティックな目的があつたこともわかる。それはもともと非政治的な柳宗悦の「情」、すなわち人間への愛情と美意識にもとづいていた。すでに言及した物と人との間の相応の論理は柳宗悦にあつては確固なものであつたとみてよく、人、すなわち朝鮮民族への敬愛は揺るがぬものとなつていたことをうかがわせる。ただこの内的な意識あるいは論理が外に向かう時、現実における日本の政治世界には批判的姿勢となることは作者柳宗悦自身もわかつていた。それが柳宗悦をして「彼」との距離を取らせたともいえる。

語り手は、このような「彼」の朝鮮旅行に伴う行動やそれに関わる「彼」の思考方法、感情などを、日記、手記、手紙などを用いて事細かく語っていく。ただそれでも、物語が始まってから中半に至るまで語り手は姿をあらわさずにいた。それでは、なぜ作者柳宗悦はそれ以後の物語のところで「記者」という語り手の正体を現す必要があつたのだろうか。その理由をさぐるために「記者」の自己が表われている箇所を検討しよう。物語のなかで、「記者」が現れているところは三箇所、朝鮮旅行中起きたエピソードを語る時と、手紙を引用するところだ。

彼の二十日間の滞京は彼に忘れ得ない幾多の印象を残し

た。(中略)記者はこゝにそれ等の二三を語る事が、彼の氣持ちを一層明らかに博へる道であらうかと思ふ。(三四頁)

記者は彼の許に届いたと云ふ多くの手紙から二三の例を茲に引用しようと思ふ。記者は此手紙を引用する事によつて、読者に種々な暗示を贈る事を希つてゐる。芸術を通して朝鮮に近づく者が、如何に心からの愛を感じるか。又かゝる眼を通して朝鮮に近づく時、如何にそれ等の心が朝鮮の人々によつて愛を受けるか。是等の手紙はその活きた例を語るであらう。(四五頁)

記者は彼の許に届いたと云ふ多くの手紙から二三の例を茲に引用しようと思ふ。彼はそれ等の引用が、余り彼自身の事に関するので、その発表を躊躇したが、然し記者は之によつて彼の朝鮮に対する情が日本に於て一個の例外ではないと云ふ事を示したく思ふ。(四七頁)

これらの引用文を総合的に考えてみると、語り手の「記者」は「彼」の性格や人物像、そして、「彼」を見つめる人々の存在に対して距離を置く第三者として客観的に語っていることがわかる。それでも「記者」の語りの目的はきわめて明確である。それは最初の引用文にある「彼の氣持ちを一層明らかに博へる道」を具体的事実とおして伝えることであり、また朝鮮で「彼」に起こったエピソードを語るることによつて「彼」の心

に起きた出来事を読者に伝えることである。そして、二つ目の引用文からは、「芸術を通して朝鮮に近づく者」の心が「朝鮮の人々によつて愛を受ける」という、前述した物と人との間における相応の論理を民族を超えて可能であることを可視化しようとする目的もあつた。それは芸術の力といつてもよく、このように芸術を介して民族が対等に向き合うことの可能性を可視化するのだ。しかし、この非政治的な美意識が、植民地主義における宗主国と被植民国の間にもちこまれる時、政治的文脈で読み変えられる危険はつねにある。それでも語り手の「記者」は、芸術を媒介に日本と朝鮮の二つの民族の心が通じ合っていることを手紙をとおして読者に示唆しようとしていることがわかる。最後の引用文からは、「彼の朝鮮に対する情が日本に於て一個の例外ではない」ことを、つまり、「彼」の氣持ちと芸術の力に対する「彼」の信頼とがけつして「彼」のみの主観などではなく、広く日本の人々に共有されていることを、「彼」に宛てられた多くの手紙で示そうとしている。これが「彼」の一人称の語りになかった理由の一つにあげることでもできよう。

手紙は、語り手が「彼は彼の旅行によつて異なる日本人々に博へようとの希願があつた。此事は彼の許に届いた幾多の人々の手紙によつて立証する事が彼には出来た」(二一九頁)と述べていたことを、引き受ける形で紹介されていく。これがリアリズム小説のような叙述構造を意図したわけであろう。この手紙は、日本の各地のみならず、「幾多の好意のある手紙が京城から」(二二一頁)も送られている。それならこのような手紙が果

たす機能とはなんだろうか。語り手は、時々「記者」という自分の正体を前面に出して、「彼」宛てに送られた手紙の内容を読者に明らかにしている。その手紙の内容が「彼」の考え方の共鳴であるところから、「彼」の考え方が「彼」一人にとどまらないといったさきほどの言及がここで確認される。こうして「彼」の朝鮮に対する〈主観的〉な読みを、〈客観的〉な読みと転換させていくことがわかる。つまり手紙は、まず、語り手である「記者」の介在をとおして「彼」の朝鮮への情や想いを外部へ開く機能を果たし、さらには、語り手が「彼は是等の手紙によつて若い日本人々が、既に朝鮮の温い味方であるのを見出し」(四九頁) ているといっているように、「彼」と日本や朝鮮の多数の若者との共鳴・連帯関係を可視化する機能をももっているのだ。このように「彼」という語りの叙述構造や手紙は、物語を主観から客観へ、個から集へ開いていくのである。

## 二「彼」のまなざしによつて可視化される朝鮮

### (一) 白衣の朝鮮人と旅行者

それでは作者柳宗悦が、朝鮮旅行をする「彼」をとおして伝えたかったメッセージとはなんだったのだろうか。そのメッセージを解いていくために、まず、この節では、二つの項目に分けて、主人公「彼」の二十日間の朝鮮旅行の旅路に沿って検討していくことにする。

一般的に旅行者とは観察者の位置を保ちながら、異国の文化を翻訳し、新しい情報を収集する。このような旅先での新しい

情報収集とは、旅行者が旅立つ前に事前知識として覚えておいた情報の確認をしながらすることだろう。その時旅行者のまなざしは、焦点を定め、異国のある状況や風景を再構成する機能を有している。ならば、「彼」のまなざしによつて、再構成された朝鮮の状況、または、風景とはどのようなものだろうか。ここでは、「彼」のまなざしによつて再構成され「記者」の語り手によつて可視化された「朝鮮」という表象を考察するために、まず、従来の朝鮮旅行者に見えていた、いわばステレオタイプ化した視線を確認する。

一九一〇年代の日韓併合期の言論界では、朝鮮についての話題が大きな位置を占めていた。それとともに朝鮮への興味が高くなり朝鮮旅行者の数も増えつつあった。旅行者達は、総督府や多くの出版社から刊行された出版物をとおして、朝鮮についての情報を得ていただろう。そのような多くの出版物に載せてある写真から見られるのは、西洋式建築物が建てられ近代化されつつある朝鮮という空間で生活している白衣の姿の朝鮮人である。多くの朝鮮旅行案内記やそれに類するものには、似たような写真が多く、それを見てから朝鮮を訪れる多くの旅行者が最初に眼にするものは、白衣姿の朝鮮人が群れている風景だったろう。

このような朝鮮人の白衣の姿は、煙管を銜えている姿とセットになって、前近代的な朝鮮として、当時の朝鮮人のマイナスイメージを形成する典型的な表象方法のひとつであったとされる<sup>1)</sup>。しかし、白衣や煙管で語られる朝鮮人のマイナスイメージが、必ずしも日本の植民地である朝鮮の一般的イメージ

そのものではなかった。それを、次の京城の案内記より確認してみよう。

『新撰 京城案内』は、大正二年（一九一三）総督府より発刊された。それをおして総督府が植民地の近代化に尽力しているかをアピールする意図をもっていたかは次のような事情から知られる。朝鮮総督府は、一九一二年十一月「京城市区改修予定路線」や一九一三年二月「市街地建築取締規則」などを発布し、都の都市改造に力を入れていた。それ以前から京城は、総督府によって朝鮮総督府（一九〇七年）、東洋拓殖会社（一九一一年）、漢城銀行（一九一二年）などのような近代的な建築物が建てられ、都市景観のイメージが変化しつつあった。このような京城の景観の変化とともに発刊された『新撰 京城案内』の例言には、「京城の発展は驚く計りにして日本内地人の

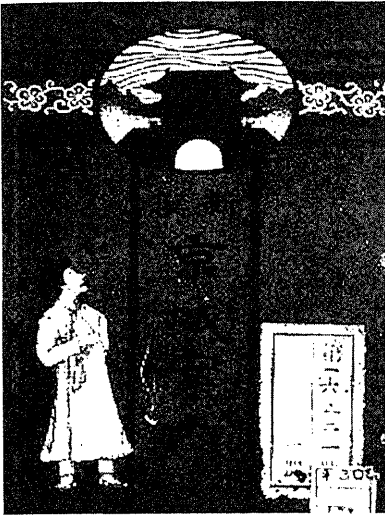


図1 『新撰 京城案内』

数今や五万当局の四区改正に伴ひ居然として大陸の大都府を建設せんとす本書は此発展の大風潮に伴ふ一般の要求に応じて編著せるものなり「眠れる鮮人は生氣を振作し産業勃然として興起せん」とあって、その趣旨が総督府の本書発刊の意図を明らかにしている。

実際この本を開いてみると、当時新時代的な建物で整備された朝鮮の市街を撮った多くの写真が掲載されていて、その写真から総督府によって整備され近代化されつつある京城という都市に代表される朝鮮の雰囲気を感じることが出来る。しかしその一方では、本の表紙に描かれている長い煙管の白衣姿の朝鮮人の絵から見られるように、朝鮮人を象徴するイメージが変わることはなかった。そしてそれを強調するかのように、本文の内容の一部には、「朝鮮人と白衣……白衣改良論」という一節がもうけられ、次のような説明が書かれている。

さはあれ此京城に於て今尚汚れ易き白き衣服を纏ひ頭に破壊し易き冠を戴き不自由なる長き煙管を握りて徐ろに労働の圈内より去りて柳陰河畔の仙境に徇追す嗚呼何たる風流ぞや（『朝鮮人と白衣……白衣改良論』『新撰 京城案内』、一九一三年、一四六頁）

この引用文を「例言」の言葉と繋げて見てみると、『新撰 京城案内』記は、「京城の発展は驚き」、「本書は此発展の大風潮に伴ふ一般の要求に応じて」制作されたものとされている。しかし一方で、引用文からもわかるように、その「京城に於て

今尚汚れ易き白き衣服」を着て、「長き煙管を握りて」いる朝鮮人は、近代的な京城という都市の「労働の圈内」には相応しくなく、「仙境に徜徉す嗚呼何たる風流」であるといっている。それは、朝鮮の街の空間は近代的に整備され、新しく変わりつつあるが、その街のなかを歩いている朝鮮の人々は変わることなく、古い服装の姿のままで、近代的な街並みには相応しくないだけではなく、京城の近代化にとってはなんら価値が見出せない人として描かれているのだ。そこに近代と反近代の対立を見出すことができる。つまり、総督府の植民地認識は矛盾しているようにみえる。しかしそれだからこそ、やがて矛盾は解消されねばならないという帝国主義的論理を内包していることは間違いないだろう。つまり、〈反近代〉を排除するか、教化するか、のいずれだが、ただ強く要請されているのは〈近代人〉である日本人の意志を押し進めようとする植民地政策であることだけは確かだったろう。ここで反近代と用いた語は、後に用いる前近代とは異なる。前近代が近代へと連結する歴史的な文脈を構成し、価値認識を超越している概念とすれば、反近代とは近代に対立する断絶しなければならない事実である。それは政治的な文脈に沿う価値の範疇に属する悪・醜なる存在である。京城案内といったガイドブックはこの近代と反近代の価値認識で京城の景観が二分されているといえよう。

似たような時期に刊行された『釜山鳴録江間 写真帖』（一九一一年）や、『朝鮮要覧』（一九二二年）などの朝鮮に関する案内記などを見ると、写真で視覚化された朝鮮の風景のなかで、このような近代と反近代という図式を読み取ることは難し



図2 南大門通の一部

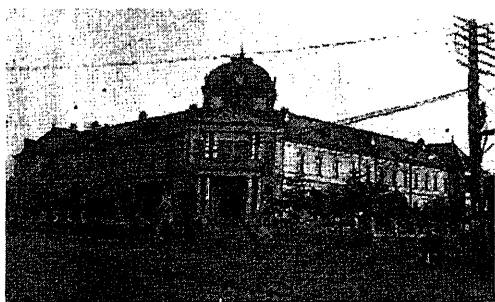


図3 東洋拓殖会社

くない。おそらく朝鮮の旅行者は、このような案内記などを読み、朝鮮に関する事前知識を覚えただろう。その知識を伝える情報誌には、総督府によって近代化されつつある朝鮮の風景、そしてそれとはまるで異質の朝鮮人の姿がはっきりと描かれているものが多かった。朝鮮旅行に赴く柳宗悦もおそらく事前情報を読んで知っていたろう。というのは、近代と反近代の図式こそ「彼の朝鮮行」において対峙する植民地イメージになっているからである。あらかじめいえば、「彼」の美意識は京城の景観を近代／反近代から、近代／前近代へとあらためてずらすことで、「近代」という価値認識から解放して歴史性へと属し、歴史という文脈における前近代に美と創造の価値を見出そうとする。このテキストはまさに「彼」のまなざしによる〈知〉の転換に意図があったということも指摘できよう。

## (二) 白衣の人と古地図

それなら朝鮮への旅行者の一人である「彼」のまなざしは何を見、何を見ようとしなかったのだろうか。本文のなかでは、「彼」がどれぐらい朝鮮に詳しいのかは書かれていない。ただ、朝鮮の古い建築物について語る内容や、また、朝鮮に親しい友人がいることを見ると、歴史や文化などの朝鮮に関する相当のことは知っていたと推測される。

「彼」が妻と同行して、朝鮮へ向かったのは一九二〇年の五月のことである。

船が釜山に入つたその夜は朧る月夜であつた。埠頭から出

て朝鮮の土を踏んだ時、彼も彼の妻も彼の友も、どんなにか異様な興奮を覚えたであらう。発車のしらせに、せかれらる迄、夜に歩く白衣の鮮人に眼を奪われてゐた。汽車での一晩が明けて、食堂の窓から異つた景色を見た時は、水原近くにも進んでゐた。赤い土やまばらに生へた春の草や、石の多い河原が交々窓のうちに現はれてくる。只一人で牛に土を耕し乍ら、靜に煙草を薫らしてゐる姿を見ると、誰も朝鮮に入つたと云ふ心が今更にするであらう。(三二頁)

引用文を見ると、「彼」が朝鮮の地で最初に眼を奪われたのは「白衣の鮮人」なのだ。語り手は、「赤い土やまばらに生へた春の草」や「牛に土を耕し乍ら靜かに煙草を薫らしてゐる姿」といった風景を説明しながら、「彼」がその風景を眼にした時、「誰も朝鮮に入つた」ような気持ちを起こしたといっている。つまり、このような風景の説明によって、「彼」のまなざしは「誰も」と同じで、朝鮮に対する一般的な旅行者の視線であつたことが確認できる。それゆえに、このような「彼」のまなざしをとおして、「彼」が従来の朝鮮旅行者達と朝鮮に関する同じ情報を共有し、それをもつて朝鮮人をイメージしていたことがわかる。しかし、一見まなざしに差異のなさそうに見える朝鮮風景の描写ではあるが、「彼」のまなざしをとおして語られる風景には「彼」だけが見ようとしているものがあり、その風景に対する彼の解釈と、それにまつわりつく感情も異なっていることが次の文章からうかがえる。

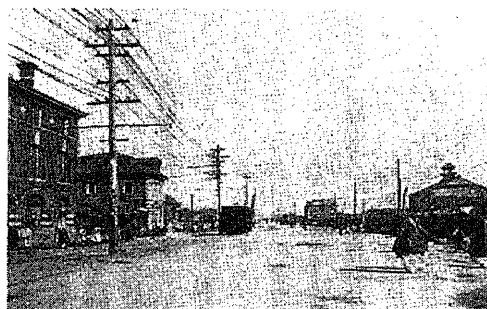


図4 鐘路通の一部

彼は鐘路の通りが好きであつた。そこばかりは昔の面影がある。こゝはまだ醜い洋風の建物に蚕食されないでゐる。然も小さな和風の安普請も、こゝでは見ないですむ。朝鮮の町々が日々それ等の力の侵害を受けるのは、抗し難い事であらうが、誰にもそれは淋しい気持ちを起させてゐる。だが鐘路の大通りは朝鮮の都だと云ふ心を今も送つてくれる。白衣の人の悠々とした姿はこゝには應はしい。(四〇頁)

語り手は、「彼」が「好き」な場所が「鐘路」であるという。そこはどのような街区だったのだろうか。当時は、日本人と朝鮮人の居住地域が分割されてお

ており、日本人の中心街は本町通り・黄金通りの南村で、ここは主な主要公共建築物が建てられ開発が進んでいた。「鐘路」通りは、北村の中心で、朝鮮人向けの繁華街があり、朝鮮人居住地域だった。鐘路を往來する人々のなかには「五百年の歴史を持つ国の五百年の首都の中央大通りが、こんなにまで醜雑とは！醜さの要点は人間どもだ」と言

われるほど、「頭から純灰色で統一して」貧しくて垢じみた服を着た人々が多く、町並みも近代的整備からとり残された状態だった。しかし、語り手がそのような状態にあつた「鐘路」を引用のように述べることで、「白衣の人の悠々とした姿」をどう解釈しているかといえ、無知で汚く近代化に遅れている朝鮮人の姿を描く点では、これまでの「白衣」で表象される朝鮮人をマイナスのイメージで表現するのとなんの変わりもないのだが、違ふのは「昔の面影」がある「朝鮮の都」に相応しい、それなりの趣があつて価値のある朝鮮人として解釈していることである。「彼」のまなざしは近代と反近代で図式化された朝鮮の風景ではなく、「白衣の人」を前近代「昔の面影」と結びつけることで価値を見出しているのだ。

このような「彼」のまなざしが具体的な行動として現れるのが、朝鮮滞在中、「町々を彷徨いその風俗や人情にふれ、又は古器物を漁り歩」きながら、「昔の面影」がある「朝鮮」をこゝとさらに選んで見つめている「彼」の姿なのだ(三四頁)。(反近代)ではなく、まさに〈前近代〉に価値を見出す「彼」のまなざしが意図的であるのは、〈近代〉に対して「彼」のまなざしがきわめて否定的であることとわかる。「彼」の朝鮮古物に対する感情を破壊しているのが「醜い洋風の建物」であり、「和風の安普請」だといふのである。朝鮮の町々の「昔の面影」を浸蝕しているのは「それ等の力」だと見抜いていることは微妙な表現といえるが、「それ等の力」とは何か。それは「古代の美と何の関りもない醜い」「光化門と勤政殿との間に実在的な西洋建築」を建てる「力」だとかええされる時、宗主国

日本の総督府の権力を暗示していることはほぼ間違いないだろう（三五―三六頁）。それを救しく思う「彼」は、「古地図」をとおして「昔の純な京城」（三四頁）を思い返そうとする。この行動で「彼」のまなざしが風景を意図的に選択していることがいつそう明らかになる。すでに言及したように、「彼」は京城の風景を近代／反近代の混沌とみようとしている。その背後には前近代の固有な美を「それ等の力」が破壊し、まったく連続させようとはしない総督府の文化政策への抗議を読みとつてよからう。そこから旅行案内書が伝える情報、すなわち図式の価値観を反転させようとするのだ。次の引用文を見てみよう。

彼が一日古本に埋つた店に入つて、学者だと云うその主人の奥の間に案内された時、彼はその温突の小さな室の壁に、京城市街の古地図を発見した。古風なその図を眺めた時、彼は昔に帰る想ひかした。近時著しく形を毀された京城を、その古地図にあてはめてみて、彼は昔の純な京城を様々に想ひ回した。彼は歴史家でもなく、又地理を学ぶ者でもなかったが、彼は彼の仕事に縁遠い此地図を、高く払つても買はないわけにはゆかなかつた。彼は此地図を見る事によつて、古い朝鮮に深く交る想ひかした。日々変化してゆく京城の淋しい運命に対しても、彼はこの地図を長く保存せねばならぬと考へたのである。かゝる地図なくしては誰が二十年、五十年の後、美しかつた京城を想ひ起す事が出来よう。人は京城を破壊しても、地図は京城を守るであらう。（三四頁）

引用文は、「彼」が「鐘路の通り」を歩いている内に偶然入つた古本屋で「京城市街の古地図」を発見した時の喜びと感動が述べられている。「彼」は「古地図」から「昔の純な京城」を「想ひ回し」、古地図を「長く保存」しようと考えて。なぜならその「古地図」のなかには「近時著しく形を毀された京城」とは違う、「それ等の力」に浸蝕されていない昔の「純な」姿があり、「古地図」をとおしてこそ「古い朝鮮に深く交る想ひ」ができ、「美しかつた京城を想ひ起す事」ができるからだ。ここからはつきりと「彼」のまなざしの選択が近代／反近代の価値観を近代／前近代の歴史認識へと反転させていることがみとれる。語り手は、「彼」のまなざしをとおして「人は京城を破壊しても、地図は京城を守る」と言っているように、「それ等の力」、すなわち総督府の力によつて古い建物が壊され、その代わりに西洋式建物が建てられ、それを近代化といっている総督府の宣伝を、古地図をとおして「古い朝鮮」の都を再構築し、そして、その街のなかに溶け込む白衣の朝鮮人を再解釈していることがわかる。このような「彼」のまなざしは、近代化されつつある街（京城）のなかに朝鮮人のいる反近代の風景をいったん消去し、白衣と煙管の旧習を固執する朝鮮人の姿がたえずむ故郷を幻視する。その意図はいうまでもなく、それによつてマイナス・イメージでもつて朝鮮人像を形成してきた従来の旅行者のまなざしを逆転させようとしているのだ。それは端的にいえば、朝鮮の美の価値認識をとおしての風景の再構築であらう。しかしそれが価値の反転をめざす時、容易に美の領

域の幻視であることを逸脱して日本帝国の植民地主義に対する痛烈な批判へと転化する。

しかし本稿があくまでも「彼」の美意識にとどまるとする。

物語のなかで、語り手によって語られる「彼」のまなざしを現す言葉を辿っていくと、語り手は、「彼」が朝鮮の芸術品をおして受けた美的感動をもって朝鮮の人々との感性と一致しようとする。そして、そのまなざしの選択を語ることで、朝鮮人の再解釈を試み、朝鮮に対するこれまでのマイナス・イメージとは違う美的創造性に富む民族と風景のイメージを作っていることがわかる。その上で、芸術をおして通じる「情」と「愛」の世界としての朝鮮を見つめようとする。そこに朝鮮の文化と人間に対する価値転換を図ろうとしていることが読み取れる。

「彼」のまなざしは、確かに中根隆行のいう、異文化独自の文化的本来性への凝視に向かったようにみえる。その意味でいえば、一般的旅行者の心性を主体とするイメージとして異文化像を描き込むといった観察者のエキゾチックな視点は捉えられない。しかしそれとともに、朝鮮本来の独自の文化に、日本文化とまったく対等な価値をもつことを認めかつ、その文化を訴えようとするのを見逃してはならない。そうすることで、「彼」をとおしてまだ日本（総督府）の植民地統治政策に犯されていない「純な京城」を見出そうとしているのだ。

しかし、このような「彼」のまなざしは、意図的に植民者／被植民者という政治的な二項対立への批判がまずあって、その姿勢から生じたものではないことはこれまでも示唆しておいた。そのまなざしとは、総督府によって新しく構築される近代

的都市の景観と、その一方で、そのために失われつつある「古い朝鮮」の風景を眺めるものだった。したがってテキストの叙述は、美の価値観によって「彼」のまなざしが選択したものだった。あくまでも京城の錯雑した風景のなかから朝鮮固有の美の景観を選び出し、叙述のなかに構築しようとする芸術家の美の表現をめざしたといえよう。そして、再構築された朝鮮の風景によって、植民地主義的な近代／反近代という図式化された政治的文脈を固有の人と物が連続して均衡を作っている近代／前近代の歴史的な文脈へと転換させる。そして、過去の歴史のなかから、現在の抑圧されている被植民地朝鮮と朝鮮人の価値を見出している。

### 三「彼の朝鮮行」のなかの二つの物語

#### (一) 女教師と小供、そして日本人と朝鮮人の居る風景

前節で語り手が、「彼」のまなざしをとおして旧風景を再構築することで、政治的な文脈を歴史的文脈に転換させ、朝鮮に固有の美と創造力を支える人々とその風景を描き出し、それは戦略として価値転換を図ったことだと述べた。それなら、新しく再構築されていく朝鮮の風景のなかで、「彼」の物語はどのように描かれているのだろうか。この節では、「彼」と「朝鮮人」が交わっている場面をとおして、そのような風景のなかで「彼」の物語がどのように描かれているのかを考察していく。前節で述べたように語り手は、「彼」の朝鮮旅行の目的とは、「異る日本人々に博へよう」とし、また、朝鮮で「他の幸な

「世界」があることを「味うと」することだと書いていた。それなら「彼」は、朝鮮でどのような「幸な世界」を味わうことができたのだろうか。いくつものエピソードのなかで「彼」は二十日間の滞京中忘れ得ない幾多の印象を残しているが、「記者はこゝにそれ等の二三を語る事が、彼の気持ちを一層明らかに傳へる道であらうかと思」い、それらのエピソードの一つを次のように書いてある。「彼」が仁川に行った時に、十二三才ぐらいの女の子と同乗することになるが、その車が目的地に着いてすぐ「彼」は次のような場面遭遇した。

彼があとを続いて車から降りた時、彼の眼には突如見慣れない美しい光景が映つた。一人の若い日本の女教師が、それ等の小供を抱くように撫でてゐた。小供は先生の名を呼び続け乍らその二つの袂にすがつてゐた。(中略)之を見れば彼の眼からは、急に涙がとめどなく落ちた。おゝ如何に此世での美しい出来事であらう。(中略)若しも人に母の様な愛があつて、又人に小供の様な至純な愛があるならば、どんなにか此世が喜びの世界であらう。(三七―三八頁)

語り手の「記者」は、「彼」がこの「出来事」を想い出すたびに幸せな気持ちになり、相当に「彼」の印象に残ったことだと記している。引用からもわかるように、「彼」が見た光景は、「一人の若い日本の女教師」と「小供」が母子のように親しく接している場面だった。語り手の「記者」は、この場面が「彼

の眼には「日本では「見慣れない美しい光景」に映つたという。そう語る背景には宗主国日本と植民地朝鮮という政治的關係がつねに支配／被支配の権力關係として捉えらるゝといったことがあつたとみてよい。まるで主人と従者のような権力關係を見せつけられてきた「彼」は、それらとは異なる状況におかれてゐる個と個の愛情の交換の場面に出会つたのだ。そして、それを朝鮮風景の一つとして読者に見せているわけだが、なぜその場面が「彼」を感動させたのだろうか。そこには芸術を媒介とする「彼」の他者観が大きく影響している。すでに触れたことだが、芸術はそれぞれに独自で、それぞれの民族の創造性にもとづくとすれば、その間に優劣などでは判断できず、等しく価値が認められて当然である。そうである以上、それぞれの民族も当然対等な立場に置かれるべきだ。このような美の認識がここでの教師と小供の愛情の交換の場面の背後を貫くものとなっている。物の持つ普遍的な美が民族を超えて人と人の「情」「愛」をもつて貫き、そこに共有・共感の世界がある。それが「彼」の確信だつたからこそ、この場面が感動したのだ。

テキストでは、「之とは異なる内容ではあるが、同じ様な出来事」であるといつて、続けて次のようなエピソードを書いている。

之とは異なる内容ではあるが、同じ様な出来事が彼自身の上にも与へられた。  
(中略)此時ふと彼の肩を静におさへて彼の耳に早く囁いた朝鮮の人があつた。

「今晩は貴方がたに迄警察の監視がひどい様です。速記者二人迄来てゐる位ですから、どうか注意して話して被下さい。貴方の御身の上に若しもの事が起つてはすみませんから。」公衆の中で突然に彼に囁いた此言葉は、どれだけ深い感情を彼の心に起こしたであらう。（中略）思ひつ思れつ、ある此瞬間の出来事が彼の胸には消えない記憶を残した。彼は情の此世にどれだけ深い喜ばしさを味つたであらう。日本人々をして朝鮮の味方である事を希つたその時、彼は実に朝鮮の人によつて味方せられた彼であつた。

（三八―三九頁）

この出来事は、「彼」が朝鮮の旅から歸つてきてからのことで、朝鮮人のある会合の依頼を受けて、講演をする時の話である。講演をするホールには日本人・朝鮮人とりまぜて二百人近くの人がいて、そこには、数人の「警察の監視」も混じつていた。いつ講演が中止され逮捕されるかも覚悟しなければならぬ危険な状況のなかで、「彼」は講演を行わねばならなかつた。そこで出来事が起こつた。語り手の「記者」は、「彼」がそこで起こつた「出来事」で喜びを味わい、消えない記憶として心に刻まれているという。

「記者」が描いているこの場面には、三つの異なる立場の人々がいることがわかる。まず、「彼」がいて、彼の身の危険を知らせてくれる「朝鮮の人」がいて、そして、彼を監視する「警察」がいる。語り手の「記者」は、このような立場の人々、つまり植民者、被植民者の間に緊張がみなぎる場面を描写してい

る。植民地と宗主国の関係が表象されてもいるこのようなエピソードを書くことをとおして、「彼」がおかれている政治的に微妙な状況を描いているのだ。そして被植民者である「朝鮮の人」に愛され信頼されている「彼」と「朝鮮の人」の関係、つまり、「情」に交る時、矛盾する二つの心がない事」の「情」「愛」による物語をより明らかに見せている。また「彼」が感動をするその場面には、美意識による解釈が要請されよう。芸術が作品と制作者を結びつけ、そこに他者としての鑑賞者が加わると、鑑賞者は芸術の美に生じる「情」「愛」を感じる。そしてその「情」「愛」が作品の制作者、さらにはその背後にいる民族の偉大性へと大きく拡大される。柳宗悦が朝鮮人への「情」「愛」を限りなくつのらせるのは、まさに芸術に媒介されているからであつた。そしてその「情」「愛」は朝鮮人が自分に向けてくれる「情」「愛」と響き合うことで倍加されるのだ。

二つの物語はまさに「彼」の「情」「愛」が織りなされた文脈として共通しているが、最初の物語と次の物語には「彼」が「出来事」に遭遇した場所も異なり、エピソードの内容も違う。しかし語り手の「記者」は、「同じ様な出来事が彼自身の上にも与へられた」といって二つのエピソードを「同じ」ことで結びつけている。それは、なぜだろうか。引用文から読み取れることは、「彼」は朝鮮のあるブラットホームで女教師と子供の関係から「情」や「愛」を感じ感動している。のみならず、「凡ての問題が此実例によつて解き得るのではないかとさへ思」う（三八頁）。また一方、日本であつた講演会では、朝鮮人との交わりのなかで感じた「情」によつて「彼の心に」「深い感情」

（愛）が起っていることが確認できる。それゆえ、いずれも「情」「愛」によって織りなされた「彼」のエピソードである以上、この二つの場面は「同じ様な出来事」として結びつけられているのだ。

ここから読み取れるのは、その二つのエピソードをもって、場所や人、また置かれている状況が異なっても、いずれの民族にとっても「愛」と「情」で共感が可能だということを、読者に語っていることだ。このような場面を「記者」というその場に立ち会った第三者に書かせることで、読者までをも、「情」と「愛」の共感する世界へと入り込ませやすくしている。

これまで本稿は、物（芸術）と人との相応がこのテキストを貫いているといってきた。他者が物を見て、そこに美と愛を直感する。すると、その美と愛は物と結びつく人（制作者）にも及ぼされる。そこに物と人との相応をふまえた人と人、民族と民族との共感を認めるわけだ。したがってこのテキストは、柳宗悦が美の領域で確信する美と愛の相応が、大きく民族・芸術（工芸品）にも拡大し、それらにもつく民族の生活と感性にも拡大しうることを明らかにしようとしたテキストとして読むことができる。

## （二）「彼の朝鮮行」がもった時代の限界

前項では、作者が設定した「彼」と「記者」（語り手）が分離され、フィクション化された小説構造で描かれた「彼の朝鮮行」というテキストのなかで、とくに朝鮮の風景のなかの「彼」をめぐる物語を見てきた。一つ目は、古地図で「古い朝鮮」の

風景を再構築したこと、二つ目は、二つの「情」「愛」の共感するエピソードを書いたこと、その物語は、「政治や軍隊によつて代表された」日本とは違う、被植民者朝鮮と「情」「愛」を共感しあえるある理想の共同体を再構築しようとしていることをみてきた。しかし、このような「彼」と語り手をめぐる理想の物語だけで、この物語が成立しているとはいえない。逆にその理想の物語を書くことで、作者が認識している、もしくは認識していない、物語の背景になる一九二〇年代における朝鮮の植民地構造が浮き彫りにされてしまい、それが作者柳宗悦の描いた朝鮮の風景と人間への憧憬、あるいは幻想を、限界づけているのではないだろうか。

したがってここでは、作者が設けた物語の構造に重点をおいて、これまでとは違う視点からあらためて物語を探っていくことで、テキストのもつ時代と思想の限界を捉えることを試みる。

前述したように、語り手がこの物語をとおして、朝鮮の風景を古地図の上で再構築し、政治的文脈を歴史的文脈に転換させ、朝鮮人の価値を見出していることについて述べた。とりわけ、「彼」のまなざしが近代／反近代という植民地主義的な図式的認識をふまえて、反近代の風景と人間を選択し、その存在に価値を付与することで近代／前近代を連続させようとする認識の可視化であったともいっておいた。確かに、このような認識の転換は、これまでの反近代的なマイナスイメージで語られた朝鮮人のイメージとは異なる認識（観念）を与える効果があるとはいえるだろう。しかし、一方では、古地図のなかの朝鮮人に

価値を与えることで、近代という風景のなかには相応しくない朝鮮人のイメージをもたらししていた。そのことがよく表しているように、柳宗悦は植民地的構図を排除ないし否定してしまっていた。というのは、近代／反近代の明確な区別を近代／前近代にずらし、しかもその前近代に価値を付与することで、反近代を排除あるいは教化するための正当化をもうろんでいた総督府の植民地政策に対して、まさに近代／反近代の価値観の転換を主張していたからである。しかしそのことを作者柳宗悦は認識していなかった。つまり彼は植民地主義の政治性には眼をつぶっていた。

「彼」は「鐘路」で偶然入った古本屋で、「学者だと云ふその主人の奥の間に案内された時、彼はその温突わんとうの小さな室の壁に、京城市街の古地図を発見」する。「歴史家でもなく」「地理を学ぶ者でもな」い「彼」は、偶然眼に入った古地図の価値を発見する。語り手はこのような場面をとおして、これまでの「歴史家」「地理」家、つまり、「学者」たちによって語られてきた朝鮮に関する既存の知識を、そのアカデミー世界とは距離を置いている「彼」のまなざしをとおして否定しているにすぎなかったともいえるのである。

「彼」は、古本屋の小さな室の壁に掛かっている「京城市街の古地図を発見」した。この「発見」とは、「彼」のまなざしにかかわるが、「彼」のまなざしは、近代／反近代という政治的な認識とは違う近代／前近代を見出したことはこれまでぐりかえし指摘できた。しかし、反近代から前近代へという認識の移行を媒介したものが「彼」の信ずる「芸術的価値」だったこ

とは見逃してはならない。そこには「近代」という価値観をひそかに相対化する前近代の価値を見出し、それが「発見」だったということが出来る。「彼」のまなざしによれば、朝鮮の前近代には固有の「美」に溢れた芸術が創作されてきた時空間が存在していた。それがまさに「古地図」に見出されたものだ。

「彼」が近代と前近代が混在化した朝鮮の風景と人間のうちに見つけようとしていた「芸術的価値」が「古地図」に見出されたといいかえてもよい。「芸術的価値」を見出そうとした「彼」のまなざしによって、古本屋の壁飾りでしかなかった古地図から「すたれてゆ」く「東洋芸術」に新しい意味が求められていく。しかし注意しておかなければならないことは、語り手のこのような論理のなかには、古地図という物の上で再構築される前近代の風景でしかないということだ。それが行き着くところ、「古代の美」を表す昔の朝鮮の建築物が幻視されることになることである。そのような古代への幻視（憧憬）の中ではじめて、そこにいる白衣の朝鮮人の価値が認められることになるだけである。したがって、このような古地図を持って朝鮮を保護する論理とするならば、「それ等の力」とは異なるが、やはり「近代」の拒否によって生じる「前近代」（昔）の価値を浮き彫りにしてしまうことになるのではないか。

このように作者は、従来から語られてきた「白衣」の言説と、そして京城北村の「鐘路」にまつわる言説を、反近代ではなく、前近代という認識を持って逆転させることで、「古き良き」朝鮮の価値を評価しているのだ。しかし、それは昔の朝鮮の価値をふりまわすあまり、近代的な朝鮮を否定する論理までもが含

まれてしまうことにならないだろうか。つまり、同時代の植民地政策に対しては柳宗悦はリアルタイムで批判したということとは、評価すべきだろうが、このような論理は、日本帝国による植民地主義言説を正当化していた「朝鮮停滞論」を強化することにもなりえるものだったことも否定できないだろう。また、朝鮮の近代化を否定し「白衣」と「鐘路」を肯定すること、<sup>10</sup>「文化政治」の主旨である、朝鮮人を政治・社会において日本人（内地人）との間に何ら差別をしないという、朝鮮総督府の支配の論理、「同化主義」を否定していることも見逃せないだろう。

この物語のなかで描いている二つのエピソードから、一九二〇年代の「文化政治」という文脈を見てみよう。物語の中で「彼」は、「若い日本の女教師」と「朝鮮の小供」の母子のような情愛の関係、そして、講演の際における「彼」と「朝鮮の人々」の信頼し合う関係をみて、感動を受けていることはすでに確認したことだ。このような感動は、「彼」の朝鮮の芸術に対する「情」や「愛」によるまなざしがあったからこそ、生じるものだったといえるだろう。語り手は「彼」が感動することのようなエピソードをとおして、「情」や「愛」によって共感し合う世界を描いている。語り手が「記者」に書かせている異民族の間に共有される感情が生まれる場面、あるいは、風景は、支配／被支配による権力関係を無化しているかのようにもみえる。しかしここでもくりかえさねばならないのだが、このような「情」「愛」の論理は、「文化政治」における親、同胞の愛という言葉と表層において一致していて、「文化政治」という文

脈に収斂されやすいことも、また認めざるを得ないだろう。そこに作者柳宗悦の美意識による民族協和の理想がオブティミスティックなゆえに時代の限界を超えられずにいるともいえるのである。

### おわりに

本稿では、作者柳宗悦が「彼の朝鮮行」のなかに装置した「彼」と「記者」（語り手）による物語構造にどのような意味があるかをみてきた。このような叙述はもともと非政治的な芸術による日本と朝鮮の連帯を求めるところにあった。それを支えている意識が美意識としての相應の理論であり、またそれを「彼」一人の考えから日本・朝鮮両国の若者に発信するうえで機能したのが手紙だった。語りのなかでは手紙の機能は強化され、手紙は外部との関係性を見せる手段として用いられ、「彼」の朝鮮への思い、見たもの、引いては「彼」の人格的な面までもを、より具体的に、また客観的に書き込むことができたわけだが、その語り自体は政治的文脈として読み取られる危険性のあることもすでに指摘しておいた。したがって、「彼」と「記者」（語り手）という物語構造は、作者柳宗悦自身をこの物語世界から距離を置かせることでより遠ざけることを可能にする機能を果たしているのだ。

また、語り手が「記者」や「彼」をとおして語る「彼の朝鮮行」という物語は、昔の「純な京城」または朝鮮、朝鮮で見た日本の女教師と朝鮮の子供の睦まじい姿、日本で出会った「彼」

を味方として受け入れてくれる「朝鮮の人々」という、植民地という現実とは異なる日本と朝鮮がいる対等であるがゆえに相互に尊敬すべき世界を朝鮮旅行をとおして見出したことで成立した物語である。そして、作者柳宗悦はこのような物語をとおして、朝鮮の風景を再構築している語り手、「彼」、「記者」、手紙を送ってくれた人々がいる、これまでの日本とは異なる日本という、ひとつの理想の物語を読者に伝えること、それがメッセージだったといえよう。

## 注

- (1) 水尾比呂志「解題」『柳宗悦全集第六卷』筑摩書房、一九八一年。  
姜東鎮「文化統治」期言論界の朝鮮問題論』『日本言論界と朝鮮一九〇一—一九四五』法政大学出版局、一九八四年。
- (2) 姜東鎮、前掲書。
- (3) このような白衣と朝鮮人のイメージ形成に関する考察は、中根隆行の『朝鮮』表象の文化誌』（新曜社、二〇〇四年）を参考にした。
- (4) 尹仁石「南村の近代建築物」『南村——時間、場所、人』ソウル学研究所、二〇〇三年。
- (5) 『釜山鶴録江間 写真帖』明治四四年（一九一一年）。
- (6) 『朝鮮要覽』朝鮮總督府編纂、大正十一年（一九二二年）。
- (7) ネヌニ「醜い京城、美しい京城」『開闢』第四八号、開闢社、一九二四年六月、一一七頁。
- (8) 中根隆行、前掲書、一五八頁。

(ヤン ジョン

筑波大学大学院博士課程

人文社会科学研究所 総合文学)